

多元的な学習を育むナラティブ・アプローチの探究

——成人学習理論との関連性検討から——

梅原 聡

Exploring a Narrative Approach to Foster Pluralistic Learning: An Examination of the Relevance with Adult Learning Theory

UMEHARA Satoshi

Abstract : In recent years, the narrative approach has been adopted in many academic disciplines in a cross-sectional way. However, it has not yet been introduced as a research method or practical method, and its active development is expected in the university education field. Therefore, this paper summarized some of the ways to handle the narrative approach in the field of education and learning support, based on previous research and its trends. In addition, this shows the connection with each learning theory and demonstrates that the narrative approach can conceptualize pluralistic learning by an examination of the relevance to adult learning theories.

Key Words : narrative, adult learning theory, development, identity

要旨 : 近年、多くの学問領域において横断的にナラティブ・アプローチが取り入れられている。しかし、大学教育現場では研究手法や実践的方法としての導入が進んでいるとは言えず、積極的な展開が待たれる。そこで本稿では、教育や学習支援の分野においてナラティブ・アプローチを扱うための道筋について、先行研究や動向を踏まえてその一端を整理した。加えて、成人学習理論との関連性検討を通じて各理論との接点を示すとともに、ナラティブ・アプローチが多元的な学習を概念化する手法であることを示した。

キーワード : ナラティブ, 成人学習理論, 発達, アイデンティティ

1. はじめに

近年、多くの学問領域において横断的にナラティブ・アプローチが取り入れられはじめている。特に社会学や文化人類学では新たな研究手法として、また医療、看護、心理、福祉などの臨床領域における新たな実践的方法として着目されている(野口, 2009)。その背景には、支配的であった実証主義への懐疑や、個人を取り巻く異なる文脈や多様な生き方を捉えることへの探究があるだろう。これは教育現場も例外ではない。筆者が身を置く大学教育現場においては、教育-

学習パラダイムシフトの中で協働的な学びが台頭し、一人ひとりが学びを生成するプロセスへの着目が進む等、構成主義的な視座が導入されて久しい。

大学教育現場は、医療、看護、心理、福祉等の実践現場と同じくナラティブ・アプローチとの親和性が高いことは言うまでもないが、研究手法や実践的方法としての導入が進んでいるとは言えず、積極的な展開が待たれる。ただし研究における質的アプローチは増えつつあり、学生の学習プロセスをインタビュー調査にて明らかにしようとする研究等は分析視点においてナラティブ・アプローチと類似性を持つ。こうした研究からは貴重な知見が多く示されているものの、ナラテ

ィヴ・アプローチの視座と比較すると、物語る際の聞き手との相互作用が考慮されていない、また物語られた結果のみを研究対象とする等、学びの捉え方は限定的である。ナラティヴ的思考はこれらをさらに拡張するものであろう。

そこで本稿では、教育や学習支援の分野においてナラティヴ・アプローチを扱うための道筋について、先行研究や動向を踏まえてその一端を整理する。

まず 2 章ではナラティヴ・ターンの背景とブルーナーの「2つのモード」(Bruner, 1996 岡本・池上・岡村訳 2004)の整理を通じてナラティヴ的思考の広がりとその原理を捉える。次に 3 章ではその解釈に幅を持つナラティヴの基本性質を整理し、4 章において発達やアイデンティティをキーワードに学習へとひらかれるナラティヴ的視点の道筋を示す。加えて学習におけるナラティヴ・アプローチの可能性を探るため、成人学習理論との関連性を検討する。以上を通じて、「ナラティヴを通じた学習」の有効性を示すとともに、ナラティヴが多元的な学びを生成する可能性を多分に含む営みであることを展望する。

本稿を通じて、教育や学習支援方策においてナラティヴ的思考を取り入れるための足場作りへの寄与を目指したい。

2. ナラティヴの広がり

2-1. 物語論的転回

昨今ナラティヴへの着目が盛んであり、現在では多くの学問領域での導入が見られる。こうした大きな動きはナラティヴ・ターン(物語論的転回)と呼ばれる。ナラティヴ・ターンは 1980 年代から発展している方法論や認識論の転換を意味し、社会科学、人文科学、自然科学など、学問横断的に大きな潮流のことを指す(Denzin & Lincoln, 2003)。

また 20 世紀は言語の世紀とも呼ばれ、言葉を基盤とした転回が各学問領域でなされてきた歴史がある。ナラティヴ・ターンも同様に、「記号学と構造主義的なものの考え方による転換を意味する『言語論的転回(linguistic turn)』(Saussure, 1922 小林 訳 1972)を前提」(やまだ, 2006, p.438)とする。言語論的転回は構造主義、ナラティヴ・ターンはポスト構造主義に影響を受けている。構造主義は言語を静的な構造として扱うのに対し、ポスト構造主義と連動するナラティヴの視点では相互作用の中で生じる動的な言語を捉える点が強調される(やまだ, 2006)。

またナラティヴ・ターンは新しい動きとして注目を浴びる一方、世界各地において、独自の言語観と共に成り立った歴史がある。質的研究とナラティヴ的思考の歴史を整理したやまだ(2006)はイギリス、フランス語圏、アメリカ、ロシアにおけるナラティヴの源流を整理する中で、哲学、心理学、社会学、言語学等を源流に長い歴史を持つことを示している。

2-2. ナラティヴ的思考と論理科学的思考

言語論的転回、またそれを前提としたナラティヴ・ターン等の認識論転換の背景には科学主義への批判があり、また多元的なものの見方を切り拓く意義が強調される。こうした視点より、ナラティヴ的思考はしばしば自然科学的な論理科学的思考と比較して整理される。ブルーナー(1996 岡本・池上・岡村訳 2004)は「人間が世界についての自分たちの知識を体制化し、管理し、実際に現前の経験をも構造化するやり方には、広くは二つの方法があるように思える。一つは、物理的なモノを扱うやり方として特殊化されており、もう一つは人々とその境遇を扱うやり方である。これらは、慣用上、論理-科学的思考と、物語(ナラティヴ)的思考として知られている」(p.52)と述べており、2つの異なる世界観を示している。前者は分類や概念を用いて事実を求めるものであり、普遍的な「真理」が存在する世界を前提としている。後者は物語や語りを用いて心情や感情や相互作用や関係性、個人の変容を描くものであり、一人ひとりにとって(意味付けの)異なる世界を前提としている。両者は「エビデンスに基づいたアプローチ」と「ナラティヴに基づいたアプローチ」と対比される(野口, 2009)が、相補的なものとしても整理される(サトウ, 2018)。

本項では、言語論的転回を踏まえたナラティヴ・ターン、また論理科学的思考と比較する形で強調されるナラティヴ的思考について示した。前者からは社会構成主義的なアプローチであること、後者からは実証主義ではない、いわば質的研究法の立場をとることが整理された。

3. ナラティヴとは

ナラティヴという言葉には具体的な定義は存在しない(Clark, 2010 荻野訳 2012)。やまだ(2007 a)は、ナラティヴを「広義の言語によって語る行為と語られたもの」(p.175)、広義の言語について、「身体や表情による非言語的語り、イメージや絵画や音楽や映画など

聴覚的語り、都市や風景など文化表象や社会的表現なども含まれる。」(p.175)と述べている。またクラーク(2010 荻野訳 2012)はナラティブの一般的な理解として、リースマン(2008)の「語り手は、日々、ストーリーを口に出して語る中で出来事を一続きのものとする。そのやり方は、結果として後の行動につながったり、聞き手にストーリーから汲み取ってほしい意味に繋がるようにである。語り手が把握している出来事は、特定の聞き手を想定して、選ばれ想像され関係づけられたもので、聞き手にとって意味があると評価されたものである。」(p.3)という言葉が著書の中で紹介している。以上は定義や表現の一例であり、立場や視点によってもナラティブの捉え方は異なる。ナラティブの持つ基本的な性質を、どのような要素を含むものとして定義できうるのか、ここではやまだ(2006)と浅野(2001)の整理を参考に検討したい。

やまだ(2006)は物語の定義を研究者によって異なると示した上で「時間シーケンスを重視する」定義、「構造(始まり-中間-終わりなど)を重視する」定義、「生成的機能を重視する」定義を紹介している。1点目の「時間的シーケンスを重視する」定義については、二つの命題が時間的に順序だてて秩序づけられることを重視するアダム(1999 末松・佐藤訳 2004)の整理を例に挙げる。次に2点目「構造を重視する」定義では、物語を「始まり-中間-終わり」という調和的時間構造によって秩序づけられると考えるものというリケール(1985 久米訳 1990)の整理を例示した。そして3点目「物語の生成的機能を重視する」定義では、やまだ自身の定義「2つ以上の事象をむすびつけて筋立てる行為」(やまだ, 2000)を参照している。

続いて浅野(2001)は、ナラティブは「時間的な順序」「視点の二重性」「他者への志向性」の3つの要素によって構成されるとした。1点目「時間的な順序」は、「出来事 X の後に Y が起きた」という出来事が起きた順序を伝える役割のことを指し、出来事が時間的に構造化され、理解が容易になるとする。2点目「視点の二重性」は、多くの物語が持つ「語り手」と「登場人物」の二重構造のことを指す。この二重構造(語り手が聞き手に語る世界と、語られた登場人物が活動する世界)を関連させるのがナラティブであるとする。最後に3点目「他者への志向性」は、ナラティブが1人だけでは成立せず、社会的な側面を持つことを指している。具体的には、他者に理解されるように出来事を選択と配列を行い、他者に伝わる意味のある物語を作るとする。

両者の整理を比較すると、やまだ(2006)の整理の1点目「時間的シーケンスを重視する」定義と2点目「構造を重視する」定義、また浅野(2001)の整理の1点目「時間的な順序」は物語の筋立てられた構造に関する言及と整理できる。また、やまだ(2006)整理の3点目「物語の生成的機能を重視する」定義は、浅野(2001)整理の2点目「視点の二重性」、3点目「他者への志向性」とそれぞれ共通項を持つであろう。「物語の生成的機能を重視する」定義として示されている「2つ以上の事象をむすびつけて筋立てる行為」は、物語を生成する過程において複数の事象をむすぶ行為という点と、他者(聞き手)との相互作用で絶えず新しい意味が生成されるという点を含むものではないだろうか。前者は浅野(2001)の整理の2点目と、後者は3点目と重なる点がある。

以上の比較より、物語は筋立てられた構造を持つものであり、それは聞き手を想定して理解しやすいように形成される。また物語る過程において、語り手は聞き手との相互作用の中で様々な事象や経験をむすぶものと理解することができるだろう。

「むすぶ」過程は意味付ける側面を持ち、ナラティブが注目を浴びる大きな要因となっている。ナラティブは単に何が起こったかだけでなく、「語り手の感情、態度、信念、解釈を表すもの」(Holstein & Gubrium, 2012)であり、物語る過程や、物語られたものから一人ひとりの意味世界に触れる事ができる。意味付与行為がナラティブな過程であるという考え方は、多くの研究者(e.g. Bruner, 1990 岡本・仲渡・吉村訳 1999: Irwin, 1996: Sarbin, 1986)によって示されている。(Clark & Rossiter, 2008 荻野訳 2010)。

定義の整理でも示したとおり、ナラティブは個人内に閉じた営みではなく、極めて社会的な側面を持つ。荻野(2011)は、ナラティブの持つ社会的な側面を2点に分けて示している。1点目は、ナラティブは他者との相互、共同行為であり、物語る際には実在上あるいは想像上の聞き手が必要であること、2点目は人々が社会的、文化的に作られたナラティブによって規定されていることである。前者は浅野(2001)整理の3点目と同様の視点からの指摘、後者は状況主義的な視点からの指摘である。サービン(1993)の言葉を借りれば、この世界は「ストーリーが象る世界」(p.63)であり、生活の傍にあるテレビやラジオ、社会的な伝統や習慣等の文化的ナラティブは「私たち自身や他の人々の経験を解釈するのに役立つ筋書きのコレクション」(p.59)であると捉えられる。私たちを取り巻く

文化的なナラティブは、理解しやすい因果的な筋道や確からしさ、正常な感覚を作る (Linde, 1993) 作用を持ち、私たちの思考はそうしたナラティブによって形作られていると言えよう。つまりナラティブとは、一見内に閉じた個人の営みのようだが、社会的な側面を多分に含んだ営みだということが示される。

4. 「学習」とナラティブ

4.1. 発達のナラティブ・アプローチ

次に本項ではナラティブの性質である「意味付与」がアイデンティティ形成、ひいては「発達のナラティブ・アプローチ」として注目を集める背景を整理する。

アイデンティティとは自分が何者であるかを自己に語り聞かせる物語 (Laing, 1961 志貴・笠原訳 1975) であり、自らの経験を、物語ることを通じて意味付けしていく過程は、しばしばアイデンティティ形成と結び付けて語られる。両者の関係をユヴァル・デイヴィス (2006) は「アイデンティティとは、ナラティブである。それは、人々が自分が誰であるか (そして誰でないか) を自分及び、他者に説明するストーリーである。」「あることや、なること、一員であること、一員になりたいと思うことといった複合的な過程を通じて、それ自体を常に組み替えていくものである。この二重性は、しばしばアイデンティティというナラティブに反映される。」(p.202) と述べている。物語る過程は、語り手自身や聞き手に対して、自身についての説明や表現をする過程であると捉えることができる。自分が誰であり、これまでどう生きてきたかを捉え、今後どんな自分でいたいのか、またどう生きていくかを自身で決めていくアイデンティティ形成はナラティブと深く結びつけることができよう。ナラティブはアイデンティティを形作る手段 (Rosenwald & Ochberg, 1992) であり、ひいては人生を形作る手段ともなる。こうした視点から発達を捉えることは「発達のナラティブ・アプローチ」(Rossiter, 1999) とも示される。

人間の発達過程を研究対象とする学問領域では、近年発達段階モデルへの信頼が揺らぎつつあり、他の補完的なモデルが模索されている。ライフステージ (ライフサイクル) 研究からライフコース研究への転換の動きもみられ、そうした中で「発達のナラティブ・アプローチ」の貢献が期待される。転換について赤尾 (2004) は、画一的な発達に焦点を当てたライフサイクル研究から、個人の辿る異なる人生の道筋へと焦点

を当てるライフコース研究へのシフトが起こりつつあるとし、台頭するライフコース研究は人間における自分史の発見を意味すること、また一個人の中の多様な発達を捉える中で意味ある他者との出会いや人生の出来事から何を学んだか、「それが自分にとってどんな意味 (meaning) を持つのか、それによって自分の認識の枠組みがどのように変容していくのか」(p.120) を明らかにするものと整理する。

発達を特定の成熟した状態への移行とはみなさず、「漸進的な変化の過程」(赤尾, 2004) として捉えられる「発達のナラティブ・アプローチ」はライフコース研究と親和性を持つと言えよう。結婚や就職、出産が共通のライフイベントとは見なせなくなる等、人生経路が多様化する社会では、個人が埋め込まれている状況や文脈の中で絶えず自律的にアイデンティティを形成していくことが求められる。その中で、予想できない事象との出会い等、自身の経験をこれまでのナラティブで捉えられなくなった際には、新たな意味付けをし、物語を変化させていくことになる。この過程は人生の再物語化 (Kenyon & Randall, 1997)、や自己の再帰的なプロジェクト (Giddens, 1991 秋吉・安藤・筒井訳 2005) とも注目され、「発達のナラティブ・アプローチ」の重要な側面と言えらる。

また、「発達のナラティブ・アプローチ」では主観的に発達を価値づけていく点、多様な物語の共存を許容する点に特徴を持つ。ロシター (1999) は発達のナラティブ・アプローチの独自性について、外部から観察するようにはではなく、むしろ内部から経験するままに発達を描く性質を指摘する。そのため生成される物語についての正解や不正解等の判断は存在せず、多様な物語の同時共存が許容される (やまだ, 2006)。一人ひとりが自らの経験を自らの声で語ることを尊重するナラティブ・アプローチでは、マイノリティや女性等の抑圧される立場の人々の「声」がナラティブとして取り上げられる。

4.2. 学習におけるナラティブ・アプローチ

やまだ (2000) は著書の中で、「自分自身がしらすしらす身につけてきた物語を自覚化し、再編し、語りなおしていくプロセスが教育であり発達であり、治療であると考えることができ (中略) 人生を『物語』とみる見方は、『自己』を『物語』としてとらえ、語りなおすことで、新たな自己を構築する考え方」(p.31) を導くと指摘する。前項の整理も併せると、ナラティブ・アプローチは変化していく過程を捉えることが可

能であり、また過去に生成した自分に関するストーリーを度々語り直し再構築していく過程に意味を見出す。治療という観点では、ナラティブ・アプローチは既に心理療法として用いられており、逆境等の困難な課題に直面する患者のストーリーを、共に再構築する過程を通じて患者の回復を目指すセラピーが取り入れられている。ナラティブが「時間的にも空間的にも『今』『ここ』を越えるイメージをつくりだし、未来を変えていく力をもつ」(やまだ, 2007 b, p.66)ものと捉えることができるのであれば、「学習」への寄与も検討することが十分可能であろう。

本項では、クラークとロシターによる検討を中心に、「学習」におけるナラティブを捉えた議論を整理する。

まずはクラークとロシター (2008 荻野訳 2010) による「ナラティブを通じた学習」に関する整理を提示しておきたい。ナラティブが持つ意味付与の機能を踏まえ、物語を聴く、語る、理解する(分かる)ことの3点の学びの視座を提示している。1点目の「聴く」ことについては聞き手としての学習に焦点が当たる。ここでは物語が学習者(聞き手)を深く引き込む点が強調される。次に2点目の「語る」は、語り手としての学習に焦点を当てる。物語る過程を通じて複数の経験や事象をむすび、意味付けをしていく点を強調する。また、省察する中でただ過去の経験を思い出すのではなく、「概念と経験とのつながりを作り、そのつながりを作る中から新しい学習が生まれること」(p.97)が重要となる。そして3点目の「理解する(分かる)」は、学習者が経験のナラティブな基本特性を「理解」することを示す。理解を深めるにつれ、「彼らは自身がナラティブに構成され、ナラティブに位置付けられていることも理解し(中略)ナラティブな状況性に気付けば、学習者はより大きなナラティブを批評」(p.98)することができる。この3点の視座はナラティブが生成される過程における多面性をよく表している。またその有効性は各学問領域における実践例からも示される。例えば1点目「聴く」ことを通じた学びとしては、ケースメソッドを用いた専門職養成が挙げられる。職業をめぐる環境や、そこで直面する容易ではない状況を当事者から聴き、知ることを通じて自らの経験に引き付け、自らの経験や価値観とも重ね合わせて学習実践が進む。こうした語り手との相互作用の中で、自らのナラティブが再構成されていく。2点目の「語る」ことによる学習は前述した心理療法の現場におけるオルタナティブ・ストーリーの形

成や、大学教育実践における「体験の言語化」(河井他, 2017)等が挙げられる。こうした物語ることによる省察、自己の再形成は多く活用されており、例を挙げればきりが無い。3点目の「理解する」の例にはロシターとクラーク(2007)が示す「社会活動劇」が挙げられる。ここでは地域住民同士で人種文化の差異への理解を深め、地域の変化を促すことが目的とされている。このように、「ナラティブを通じた学習」は多面性を持ち、またその中で多様な学びが生まれていると言えるだろう。

こうした「ナラティブを通じた学習」は、従来の学習理論とどのような関連を持つのであろうか。この点に関しても言及は多くないものの、クラークとロシターはいくつかのアイデアを示す。以下、国内外の先行研究実践も参考にしながら成人学習理論との関連性を検討したい。なお、ここでは「経験学習」「変容学習」「状況学習」「批判的学習」の4つの理論を取り上げる。

まず「経験学習」であるが、最も有名なのはコルブ(1984)による論であろう。学習を、経験が変容することによって知識が生み出されるプロセスとして捉え、そのモデルとして「具体的経験」「反省的観察」「抽象的概念化」「積極的実験」の4要素が循環する様を示す。クラークとロシター(2008 荻野訳 2010)はナラティブについて、学習と経験とを深い人間的なレベルにて結びつけるとする。経験自体は前言語的な性質であるが、経験を語る過程で意味付けされていくものとナラティブはみなす。つまり、経験を振り返る中で学びを得る過程は経験学習と「ナラティブを通じた学習」の共通項と言えるだろう。こうした経験を重要な資源と捉える視座はアンドラゴジー論(Knowles, 1980 堀・三輪訳 2002)とも共通点を持つ。

次に整理する「変容学習」も経験学習と同様に様々な理論が展開、拡張されてきた歴史がある。なかでも今日までに展開された変容学習の基礎を築いた代表的理論である、メジローの意識変容の学習理論を取り上げる。メジロー(Mezirow, 1991 金澤・三輪訳 2012)は、理性による批判的省察を重視し、それを通じて経験や事象を解釈するための枠組み(準拠枠)が変容するモデルを描いた。経験を省察するだけでなく、その経験の解釈に用いる準拠枠の変容に焦点を当てる。準拠枠の変容が生じるきっかけは、大切な人の死等の予測不可能な事象を通じたジレンマであり、そうした経験の解釈を通じた自身の認識変化を扱う点は「ナラティブを通じた学習」の共通項である。前項でも述べた

が、自身の経験を過去のナラティブで捉えることが困難になった場合には、物語を変化させていくことになる。オルタナティブ・ストーリー構築を目指すナラティブ・セラピーはその一例であり、ジレンマを経験した後の語り直しの中で認識が変容する様子は、「ナラティブを通じた学習」の中で変容学習を捉えた例と言えるであろう。加えてロシターとクラーク (2007) は、変容学習においてしばしば批判の対象とされている合理的、自律的な自己像に対し、ナラティブの視点を加えることにより新たな観点が示されることを指摘している。ナラティブは人々が語りを通じて形成する意味世界を描き、合理性を踏まえた予測ではなく、複雑性の中での行動や変容を捉えることができることが示唆される。

続いて扱う「状況学習」はレイヴとウェンガー (1991 佐伯訳 1993) が提唱したものであり、「学習を社会的実践という状況に埋め込まれたものとし (中略)、社会的実践への参加を通じた知識・技能の獲得と参加のアイデンティティの形成としてとらえる学習論」(杉原, 2011, p.56) である。実践共同体への関わりが十全的な状態へと変わる様を学習と捉え、そうした学習の中でアイデンティティが形成されていくとした正統的周辺参加論が著名である。レイヴとウェンガーが正統的周辺参加論を整理する中で例示する「アルコール依存者グループの語り」はまさに「ナラティブを通じた学習」のひとつと言えるであろう。語ることを通じて自身がグループ (集団) の一員であることを認識し、またそれを他者に表明していく経過は、物語ることによって実践共同体への関わりを深める例であり、「ナラティブを通じた学習」の中で正統的周辺参加の様子が捉えられることを示している。また共同体における語りは、集団の歴史やルール、通過儀礼を学ぶ機能を持つ (武田, 2001) ことから、コミュニティでの経験を自身とむすび付けていく点は状況学習とナラティブの接点と言えるだろう。クラークとロシター (2008 荻野訳 2010) は、ナラティブが状況認識論的な課題解決性を持つわけではないとしつつも、ナラティブは状況に埋め込まれたものと整理する。

最後に「批判的学習」との関連を検討する。「批判的教育学」という言葉の方が一般的であるが、ここでは学習視点での整理のため「批判的学習」と整理しておく。批判的とは「権力の問題や社会的不平等・不正の問題に対する批判」(植松, 2019, p.389) である。代表的な論者として、識字教育者であるフレイレが挙げられよう。フレイレ (1992 里見訳 2001) は抑圧を

受ける者が他者の助けを借りながら抑圧されている状況を対象化し、その状況を自覚的・主体的に変革する過程を「意識化」と示した。クラークとロシター (2008 荻野訳 2010) が「ナラティブを通じた学習」について、「学習者が、より大きな文化的なナラティブにどのように位置付けられて (そして自身の思考様式がどのように形成されて) いるかを考えることによってなされる」(p.98) と示す点は「意識化」の過程とも捉えられよう。加えて、フレイレ (1992 里見訳 2001) は文字の読み書きが世界を批判的に捉え直すこと、またそれは世界の書き直しであるとし、ここからも批判的学習がナラティブを通じた内化、外化のプロセスの中で生じることが示される。取り巻く社会や環境におけるナラティブに気づくことにより、社会や環境、また自身の思考を形作ったナラティブへの批判的学習が生じると整理できる。

以上 4 つの理論を取り上げて関連を整理した。「ナラティブを通じた学習」はいずれの学習理論とも共通項や接点を持ち、またそれらの学びがナラティブの中で捉えられる点が示唆された。荻野 (2011) は各成人学習理論において、ナラティブのどの点が注目されているかを整理しており (Figure 1)、本項での検討結果と重なる点がある。この点を踏まえると、ナラティブは諸学習理論と架橋する可能性を持ち、また成人学習理論間の関係を整理する可能性をも拓くことが示唆される。

学習理論	中心的な観点 (ナラティブを通じて)
経験主義	どのように、経験に意味が付与されるか
意識変容の学習	どのように、思考の枠組みが変化するか
状況的学習	いかにして、共同体や組織の価値観が内面化され、集団の一員となっていくか
批判的学習	どのように、社会を構成する価値観・前提が問い直されるか

Figure 1 学習理論とナラティブの関係
(荻野, 2011 を参考に筆者作成)

ナラティブの構築は、それは自分がどう学んできたかを明らかにすることであろう。この点をクラークとロシター (2008 荻野訳 2010) は「学習の概念化」(p.98) とし、「学習がどのように生じるかを新しい方法で考えることを私たちに提起する」(p.98) と指摘する。つまり物語を通じて学ぶことは既に示してきたが、それは自身の学びを概念化することでもある。個人の意味世界に迫るナラティブ・アプローチは多様な学習を捉えることができ、前述の成人学習理論との架

橋はほんの一例と言えるであろう。

また成人学習理論は長らく西洋を中心に発達してきたが、近年は東洋の思想や文化等、新たな視座からの理論形成が盛んであり、例えば身体を通じた学習や、スピリチュアルを通じた学習等が挙げられる (Merriam, 2008 立田訳 2010)。認知への注目から精神や身体を含むホリスティックな注目へ、また、学習が生じる多様な文脈や個人が抱える複雑性を捉えた理論視座が切り拓かれる中、学習を概念化するナラティブ・アプローチはこうした多元的な学習を射程とすることができよう。つまり、ナラティブはより多元的な、そして新たな学習を捉える可能性を持つことが示唆される。

5. 結びに代えて

本稿は、教育や学習支援の分野においてナラティブ的思考を扱うための道筋について、その一端を整理したものである。具体的には、ナラティブ的思考の広がりや原理、またその基本性質を踏まえて「学習におけるナラティブ・アプローチ」を捉えることを試みた。加えて、クラークとロシターの「物語を通じた学習」と成人学習理論との関連性検討を通じて、成人学習理論と架橋する可能性を示すとともに、より多元的な学習を概念化することができる手法であることを示した。しかし本項は理論的な検討に留まるため、示した可能性は多くの実践とともに検討すべきであろう。

本稿の最後に、臨床心理領域におけるナラティブ論の第一人者である森岡 (2013) の言葉を記しておきたい。

「科学では個人要因としてまっさきに切り捨てられるものが、現場ではもっとも支配的で、重要な課題となる。現場では一人ひとりが生きているその人に固有の現実がある。その現実を損なうことなく、個人の生きにくさをかかえた現実を少しでも、生きやすくしたい。そのような要請にかなう理論の構築は可能だろうか。」(p.7)

この言葉は学習の支援に携わる者にも深く通ずる点があろう。大学教育現場においても質的研究が取り入れられて久しく、その背景には、学生が置かれている複雑な状況や、多様な主体との関わりの中で学ぶ姿を細やかに捉えることへの探究があるだろう。学生を画一的な存在であると見なす時代は終わり、一人ひとりが多様な文脈の中で主観的に学びを価値づけていくことを重要視する時代となった。学生を支援する教職員

の立場から学生の意味世界へ接近することは簡単ではないが、ナラティブ・アプローチを用いて接近するその先には、多元的な学びを育む新たな視点が得られるであろう。本稿が大学教育現場におけるナラティブ・アプローチ展開の一助となれば幸いである。

文 献

- Adam, J. M. (1999). *Le récit*. Paris : Presses Universitaires de France. (アダム, J. M. 末松 壽・佐藤正年 (監訳) (2004). 物語論——プロップからエーコまで——白水社)
- 赤尾勝己 (2004). 生涯学習理論を学ぶ人のために 世界思想社
- 浅野智彦 (2001). 自己への物語論的接近——家族療法から社会学へ—— 勁草書房
- Bruner, J. (1990). *Acts of Meaning*. Cambridge, MA : Harvard University Press. (ブルーナー, J. 岡本夏木・仲渡一美・吉村啓子 (監訳) (1999). 意味の復権——フオークサイコロジーに向けて—— ミネルヴァ書房)
- Bruner, J. (1996). *Culture, Mind, and Education*, In J. Bruner (ed.), *The Culture of Education* : (pp.1-43) Cambridge, MA : Harvard University Press. (ブルーナー, J. S. 文化・心・教育 (2004). 岡本夏木・池上貴美子, 岡村佳子 (監訳) 教育という文化 pp.1-58 岩波書店)
- Clark, M. C. (2010). *Narrative Learning : Its Contours and Its Possibilities*, in M. Rossiter & M. C. Clark (eds.), "Narrative Perspective on Adult Education," *New Directions for Adult Continuing Education*. (pp.3-12) San Francisco, CA : Jossey-Bass. (クラーク, M. C. 荻野亮吾 (2012). ナラティブ学習——その輪郭と可能性——立田慶裕・岩崎久美子・金藤ふゆ子・佐藤智子・荻野亮吾 (監訳) 成人のナラティブ学習——人生の可能性を開くアプローチ—— pp.16-29 福村出版)
- Clark, M. C., & Rossiter, M. (2008). *Narrative Learning in Adulthood*, In S. B. Merriam (ed.), "Third Update on Adult Learning Theory" *New Directions for Adult Continuing Education* : issue 119, (pp.61-70) San Francisco, CA : Jossey-Bass. (クラーク, M. C., マーシャ ロシター, 荻野亮吾 (2010). 成人期のナラティブ学習 立田慶裕・岩崎久美子・金藤ふゆ子・荻野亮吾 (監訳) 成人学習理論の新しい動向——脳や身体による学習からグローバルゼーションまで—— pp.91-104 福村出版)
- Denzin, N., & Lincoln, Y. (Eds.). (2003). *Strategies of qualitative inquiry*. *Handbook of qualitative research* paperback edition Vol.2 (2nd ed.). Thousand Oaks, CA : Sage Publications.
- Freire, P. (1992). *Pedagogia da esperança : um reencontro com a pedagogia do oprimido*. Paz e Terra : Rio de Janeiro. (フレイレ, P. 里見 実 (監訳) (2001). 希望の教育学 太郎次郎社)
- Giddens, A. (1991). *Modernity and Self-identity : Self and Society in the Late Modern Age*. Stanford, CA : Stanford

- University Press. (ギデンズ, A. 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也 (監訳) (2005). *モダニティと自己アイデンティティ——後期近代における自己と社会——* ハーベスト社)
- Holstein, J. A., & Gubrium, J. F. (Eds.). (2012). *Varieties of narrative analysis*. Los Angeles, CA: Sage Publications.
- Irwin, R. R. (1996). Narrative Competence and Constructive Development Theory: A Proposal for Writing the Bildungsroman in the Postmodern World. *Journal of Adult Development*, *3*, 109-125.
- 河井 亨・岩井雪乃・兵藤智佳・和栗百恵・秋吉 恵・加藤基樹・石野由香里・島崎裕子 (2017). 複数クラス開講科目の授業リフレクション——早稲田大学「体験の言語化」を事例として—— 名古屋高等教育研究, *17*, 245-265.
- Kenyon, G. M., & Randall, W. L. (1997). *Restoring Our Lives: Personal Growth through Autobiographical Reflection*. Westport, CT: Praeger.
- Knowles, M. (1980). *The Modern Practice of Adult Education: From Pedagogy to Andragogy* (2nd ed.). New York: Cambridge Books. (ノールズ, M. 堀 薫夫・三輪建二 (監訳) (2002). *成人教育の現代的実践——ベダゴジーからアンドラゴジーへ——* 鳳書房)
- Kolb, D. A. (1984). *Experiential Learning: Experience as the Source of Learning and Development*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.
- Laing, R. D. (1961). *The Self and Others: Further Studies in Sanity and Madness*. London: Tavistock Publications. (レイン, R. D. 志貴春彦・笠原 嘉 (監訳) (1975). *自己と他者 みすず書房*)
- Lave, J., & Wenger, E. (1991). *Legitimate Peripheral Participation*. Cambridge, MA: Cambridge University Press. (レイヴ, J., & ヴェンガー, E. 佐伯 胖 (監訳) (1993). *状況に埋め込まれた学習——正統的周辺参加——* 産業図書)
- Linde, C. (1993). *Life Stories*. New York: Oxford University Press.
- Merriam, S. B. (2008). *Adult Learning Theory for the Twenty-First Century*, In S. B. Merriam (ed.), "Third Update on Adult Learning Theory" *New Directions for Adult Continuing Education: issue 119*, (pp.93-98) San Francisco, CA: Jossey-Bass. (メリアム, S. B. 立田慶裕 (2010). *21世紀の成人学習理論* 立田慶裕・岩崎久美子・金藤ふゆ子・荻野亮吾 (監訳) *成人学習理論の新しい動向——脳や身体による学習からグローバル化まで——* pp. 133-139 福村出版)
- Mezirow, J. (1991). *Transformative Dimensions of Adult Learning*. San Francisco, CA: Jossey-Bass. (メジロー, J. 金澤 睦・三輪建二 (監訳) (2012). *おとなの学びと変容——変容的学習とは何か——* 鳳書房)
- 森岡正芳 (2013). 現場から理論をどう立ち上げるか——臨床ナラティブアプローチを手がかりに—— 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, *6*(3), 7-12.
- 野口裕二 (編) (2009). *ナラティブ・アプローチ* 勁草書房
- 荻野亮吾 (2011). *生涯学習へナラティブ・アプローチ* 立田 慶・上豊 久・岩崎久美子・金藤ふゆ子・佐藤智子・荻野亮吾 (編) *生涯学習の理論——新たなパースペクティブ——* (pp.146-164) 福村出版
- Ricoeur, P. (1985). *Temps et récit: III*. Paris: Éditions du Seuil. (リクール, P. 久米 博 (監訳) (1990). *時間と物語 III* 新曜社)
- Riessman, C. K. (2008). *Narrative Methods for the Human Sciences*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications.
- Rosenwald, G. C., & Ochberg, R. L. (1992). *Storied Lives*. New Haven, CT: Yale University Press.
- Rossiter, M. (1999). *Understanding Adult Development as Narrative*. In M. C. Clark & R. S. Caffarella (eds.), *New Directions for Adult and Continuing Education*. Vol.84. San Francisco: Jossey-Bass.
- Rossiter, M., & Clark, M. C. (2007). *Narrative and the Practice of Adult Education*. Malabar: Krieger Publishing Company.
- Sarbin, T. R. (1986). *Narrative Psychology: The Storied Nature of Human Conduct*. New York: Praeger.
- Sarbin, T. R. (1993). The narrative as the root metaphor for contextualism. In S. C. Hayes, L. J. Hayes, H. W. Reese, & T. R. Sarbin (Eds.), *Varieties of scientific contextualism* (pp.51-65). Reno, Nevada: Context Press.
- サトウ タツヤ (2018). ナラティブの意義と可能性 言語文化教育研究, *16*, 2-11.
- Saussure, F. (1922). *Cours de linguistique générale*. Paris: Payot. (ソシュール, F. 小林英夫 (監訳) (1972). *一般言語学講義* 岩波書店)
- 杉原真晃 (2011). 教養教育の授業における学生の主体性形成——学習共同体での役割の再構築に着目して—— 京都大学高等教育研究, *17*, 53-62.
- 武田 正 (2001). *昔話の語りと変容* 岩田書院
- 植松千喜 (2019). 批判的教育学におけるパウロ・フレイレの受容——ジルー, アップル, マクラーレンの場合—— 東京大学大学院教育学研究科紀要, *59*, 389-399.
- やまだようこ (2000). *人生を物語る——生成のライフストーリー——* ミネルヴァ書房
- やまだようこ (2006). 質的心理学とナラティブ研究の基礎概念——ナラティブ・ターンと物語的自己—— 心理学評論, *49*(3), 436-463.
- やまだようこ (2007 a). 質的研究における対話的モデル構成法——多重の現実, ナラティブ・テキスト, 対話的省察性—— 質的心理学研究, *6*(6), 174-194.
- やまだようこ (2007 b). *ナラティブ研究——語りの共同生成——* 新曜社
- Yuval-Davis, N. (2006). *Belonging and the Politics of Belonging*. *Patterns of Prejudice*, *40*(3), 197-214.